

R&V

17号

1995年

春号 4月~6月



Ichio, Numai

R&V

17号



《photo by motozu》

雲表の槍ヶ岳

95' 春 ACC-J 茨城

R & V 発行5年目を迎えて

R & Vも17号になった。つまり発行し始めて5年目に入ったわけである。右も左もわからず、試行錯誤しながらやっとここまで来た。当会の会報は記録性には乏しい文集である。発行以来いろいろな会と会報や月報を交換させていただいている。現在交流のある会の会報を見ていると、すべて記録を重視していると思われる。私も元来会報というものは記録を発表する場と考えている。けして今の文集が悪いとは思っていないが、欲をいうともうちょっと記録性の高いものにしたいと思う。そこでどうだろう。これから原稿を提出するときは必ずルート図や遡行図を付記することにしようではないか。案内書を写したのでは意味がない。それは必ず自分で書いたものでなければ意味がない。たとえ書いたとしても一ノ倉沢南稜のルート図や丹沢水無川本谷の遡行図が採用され、会報に載ることはないと思う。それはそれらのルートがあまりにも一般的でルート図や遡行図が溢れるほどあるからである。でもやはり書いてほしいのである。当会員は私も含めてルート図や遡行図を書くのが苦手である。これはとりもなおさず書き慣れていないという理由に尽きる。どんどん書くことによって上手になっていくのだ。私は20代後半の頃、山から帰ると必ずルート図とタイムを記録していた時期があった。それを今になって見るのは非常に楽しいものである。それが、どうひいきみに見ても下手なルート図なのだが私の宝と言って良い。岩登りのルート図は日本ではせいぜい10数ピッチのルートを一日かけて登るので、下山してからでもけっこう覚えているが、沢登りはそういうわけにはいかない。すぐに記録しておかないとわからなくなってしまう。遡行図は、ゴルジュや滝、その大きさ、直登したか巻いたか、またそれは右岸か左岸かなど、書くことが非常に多い。その記録紙は、私は今、ダイビング用の防水紙を使っているが、以前はそんなものがあることも知らず、スーパーのポリ袋を開いて、それに油性のマジックインキで書いていた。下山後、清書しようとしたら、何て書いてあるのかわからなくなってしまったこともしばしばあった。繰り返すようであるが、私は今の文集ではだめだと言っている訳ではない。たとえば谷川岳の西黒尾根を、ルート図付きで事細かに書いてもつまらないであろう。だったらどこかの案内書でも読んだ方がましだ。こういう場合はその時の出来事や感想文を面白おかしく書いた方が読んでいて楽しい。問題は沢の時である。これまで岩を中心に活動してきた我々にとって、初登攀かよほどマイナーなルートでも登った時以外、ルート図など書く必要がなかった。しかし、沢は別である。一雨で溪相が変わってしまうことはめずらしくないのだ。だから一般的な沢で訓練をして、あまり遡行者がい

ないような沢に行った時にしっかりした遡行図をとれるようにしようではないか。記録性のあるルートに行った時はユーモアたっぷりの文面でもいいが、その中に記録として残せる要所要点を忘れず記載してほしい。まあはっきり言ってそれ以前の問題で、残念ながら当会でマイナーなルートに行くことは稀ではあるのだが……。あまりにも巷で言われている事なのでここで書きたくはないが、あえて書く。登山は①計画し②実行して、それを③記録して終了するという。当会員は①②はするが③は不得意としている。ということは、当会での山行は長年の間、中途半端で終わっていたことになる。これからは進んで記録し、山行をきちんと終了しようではないか。

これまで会報作りには、いろいろなクラブの会報を参考にさせてもらってここまできた。最初のうちは他クラブのまねごとでも良かったかもしれないが、発行も5年目に入ると、ただ発行すれば良いという段階はとうに過ぎている。R&Vのオリジナリティーもほしい。全国的にいつもトップレベルの会報を出している浦和浪漫山岳会の代表、高桑氏がこんなことを言っていた。良い会報を作るには、会員全員が良い会報を作るんだという気持ちがなければできない、と。私も同感である。皆がそういう気持ちになれば、おのずと原稿の提出遅れもなくなるはずだ。現在の編集長を務めてくれている生井は大変だと思うが、グチも言わず頑張ってくれている。会報編集のため、ワープロも新調したようだ。編集長の努力に報いるためにも、我々会員は、より良い会報を作るため、できる限りの協力をしなければならない。

(本図一統)



《目次》

1995年 春号4月～6月 第17号 ACC-J茨城

R&V発行5年目を迎えて	・・・	1
集会報告	・・・	4
山行報告	・・・	5
今回の山行の収穫は	・・・	6
谷川岳、芝倉沢山スキー	・・・	9
久しぶりの完登、白馬岳主稜	・・・	11
臆病風に吹かれて	・・・	14
酒と登攀の充実した5日間（穂高・岳沢定着）	・・・	16
春合宿－奥穂高南稜	・・・	21
コブ岩尾根	・・・	23
豊岩尾根	・・・	25
1995' 春合宿 奥穂南稜	・・・	26
春合宿・奥穂高・コブ岩尾根	・・・	28
御神楽岳・高頭スラブ	・・・	30
奥多摩・小川谷犬麦谷・割谷下降	・・・	32
豆焼沢	・・・	34
烏帽子沢奥壁・中央カンテルート	・・・	36
徒渉訓練に参加して	・・・	38
友好山岳団体の月報・会報紹介	・・・	39
編集後記	・・・	40

*表紙絵……チュリン氷河上部からのヒマルチュリ西面（7893m）

集会報告

(於、スカイラーク土浦真鍋店)

【 4月】

4月 5日

出席者 生井、菊池、佐藤、高須

4月19日

出席者 古山、坂本、菊池、所、高須、生井、佐藤、告

【 5月】

5月 9日

出席者 本図、木村、菊池、佐藤、古山、坂本、告

5月14日 《ACC-J東京との飲み会》・・東京浜町にて・・

出席者 水島夫妻、名雪夫妻、阿部、吉田、松原、金沢、仲川（4名）

本図、木村、菊池、古山、生井

5月24日

出席者 本図、鯉河、古山、生井、坂本、告、

【 6月】

6月 7日

出席者 本図、古山、菊池、生井、佐藤、告

6月20日

出席者 本図、菊池、古山

山行報告

1995年 4月～6月

【4月】

4月 2日	谷川岳 熊穴沢&芝倉沢	L本図、古山、告
4月16日	鷹取山	L高須、告
4月23日	船橋ロッキー (岩トレ)	L高須、本図、告
4月28~29日	白馬岳主稜	L古山、佐藤
4月29~30日	小川山 (フリークライミング)	L高須、告

【5月】

5月3~7日	春合宿・岳沢	L本図、所、佐藤、告、高須、 古山、坂本
5月 4日	南稜 コブ尾根 畳岩尾根	L本図、坂本、 L古山、告 L所、佐藤、高須
5月 6日	南稜 コブ尾根	L所、告、古山、高須 L本図、坂本、佐藤
5月21日	御神楽岳・高頭スラブ	L本図、古山、笹沢
5月28日	奥多摩・犬麦谷	L本図、菊池

【6月】

6月11日	奥秩父・豆焼沢	L本図、古山、告
6月18日	谷川岳・中央カンテ	L古山、佐藤
6月18日	徒渉訓練 (丹波川本流)	L本図、告、笹沢 with 浦和浪漫

今回の山行の収穫は？

1995. 4. 2

パーティ 本図一統単独

それはそれは昔々その昔というほどではないが、木村御大が若かったころ、二人で山スキーに来たことがあった。その時は天気が悪く雪崩の危険があったので、頂上～天神平～田尻沢のルートに変更したため熊穴沢は滑ったことがなかった。今回、古山と告が芝倉沢に行くというが、私はそこを滑った事があるので、一人で熊穴沢を降りることにした。今日のメンバーは先の二人に高須、笹沢を加えた総勢5名である。高須、笹沢の両名は天神平でスキーをするという。笹沢さんはパッチテストに挑戦するそう。芝倉沢パーティは早朝一足先に出発していった。残る三人も8時には天神平に上がった。時間があるのでゲレンデで足慣らしに少し滑る。

さて時間も10時近くなったので私も出発しよう。天神峠までリフトで上がり、天神尾根をひと滑りして、板を担いで歩きだす。ゲレンデ靴なので、少しの下りでも足首が曲がらず歩きにくい思いをした。熊穴沢避難小屋は、まだ雪にすっぽり埋まっていたが、誰かが掘り出し、出入りできるようになっていた。しばし休んでいると、男女5人パーティが上がってきた。「こんにちわ」と声をかけると、「こんにちわ。上に行くんですか」と返ってきた。荷物が大きそうなので「私はここを降りるんだけど今から縦走でもするんですか」と聞いてみると「この上で雪洞を掘って泊まるんです」という返事。「あれま～、それで綺麗どころを前に焼肉しながらビールをグイ～ですね、いいな～、うらやましいな～。俺も行って～な～」と答えるがお誘いの返事はなし。あるわけではないよな。でも俺だったら相手は本当に行く気はないんだから“一緒に行きませんか”位の社交辞令は言っておくんだけどなあ。最近、若い人にも年配の人にも、男性にも女性にも、気軽に声を掛けられるようになってきた。若い時は自分から声を掛けるなんて、とてもできない内気な青年だったのだ。俺も年をとったのかな、と感じる一瞬でもあった。さて、熊穴沢滑降だが、雪質はざらめの上に昨夜の重い新雪が5センチ位付いている。そのため先人のシュプールがまったく無い処女雪の斜面になっていた。雪崩は心配ないようなので沢底を滑る。傾斜は芝倉沢稜線直下ほどではなく、30度はないかもしれない。沢の形状は振り子沢で、こんな所は飛行機滑りの菊地が得意とする所だろうなあ、と思いながらパラで降りて行く。振り返ると自分のシュプールがくっきりと蛇行して見え、悦に入ってしまった。よしこれは写真

を一枚撮っておこう。ふと見るとかわいらしいバッグが落ちている。開けてみると財布とネックレス、スカーフなどが入っており、女性の登山者が落としたと思われる。住所名前を確認しようとするも何の記載もなかった。ザックに仕舞い再び滑り出す。高度が下がってくると、鉛のように重い雪のターンには難渋した。デブリの上は自分の技術では何ともこなせず、右岸の斜面を横滑りで慎重に通過する。単独でこんな場所で骨折でもしたら最悪だ。ザラメの所はまあまあ滑るが、新雪に入ると急ブレーキがかかったように、前につんのめりそうになり、それが恐くて意識的に後傾になってしまう。俺もまだまだあかなと、自分の技術の未熟さがはっきりわかる。私はここ数年、技術はまったく進歩していない。ただ、ぶん流して滑っていただけだから仕方ないだろう。反省反省。来シーズンは向上心を持って滑ろう。講習も受けよう。やがて田尻沢と合流すると、もうゲレンデと同じようなものでよく滑った。ロープウェイ駅に着いて時計を見ると、20分しかかかっていなかった。参考コースタイムでは1時間となっていたが、思ったより早く着いた。車の所で少し休んで汗をひこます。今日は天気が良いのでとにかく暑い。ビールをグイっといきたかったが、今から検定の人もあることだし、そういうわけにもいかんだろうと我慢する。ロープウェイで再び天神平に行く。芝倉沢パーティと交信時間が近づいていたので、すぐ天神峠に上がる。芝倉パーティはまだ一ノ倉岳に着いていないという。なんでもアイゼンを持っていないので、一部苦労した箇所があったそう。アイゼンなんていらねーよ、と言った俺の判断がまちがっていたらしい。交信後、3人でレストハウスに入る。笹沢さんは、まもなくして結果を聞きに行ったが、バッチを手如意気揚々と帰ってきた。合格したそうだ。まずは良かった。高須はそれに刺激されたか、午後はスキースクールに入ると言い出した。私は大賛成だ。金にかかるが、ちゃんとした指導員にしっかりした指導を受けたほうが、絶対上達は早いと断言できる。もう一つ、自分より上手な人と一緒に滑ることだ。別に教わらなくても良い。その人の後を付いて行くことで、コース取りや、滑り方など、後になってイメージトレーニングにもなる。

夕方、そろそろ降りようかと話し合っていると、一人のスキーヤーが近寄ってきた。いきなり高須の履いている板を指差し「これあなたの板ですか」と言う。高須がまちがっていたのだ。その板は本当に高須の使っていた板とそっくりで、貸しスキーを使っていたので分からなかったのだろうが、ストックがぜんぜん違う。まちがわれた相手はたまったものではない。午後から滑れず、ずっと探していたのだろう。ずいぶんと迷惑をかけてしまったが、当の高須の旦那が以外とケロっとしているのには呆気にとられてしまった。



自分のシュプールを見るが……………。

芝倉沢パーティに時間を合わせるように田尻沢を降りる。といっても結果的にはリフトが止まるまで滑っていたのではあるが。田尻沢は以前よりコースが整備され、とても滑りやすくなっていた。一応、滑降禁止になっているのだが名目上だけのようだ。車で待つこと少々で古山、告パーティが帰ってきた。悪雪に苦勞したとの事。諏訪峡温泉で汗を流し帰路につく。

それから蛇足になるが、拾ったバッグは現在私が預かっている。バッグから想像するに、持ち主はきっと西田ひかるみたいなかわいい子だろう。でも、わからないので、そろそろ処分しようと思っている。財布の中身は既に私が使用済みであり、ネックレスは現在質屋で保管中であります。

天神峠(10:15)－避難小屋(10:43~10:58)－ロープウェイ土合口駅(11:21)

(本図 記)

谷川岳、芝倉沢山スキー

1995. 4. 2

パーティ L古山正文、告 弘道

土浦で高須さんを拾い、下館集合の本図さん、笹沢さん、告君とで谷川岳ロープウェイ駐車場に向かう。駐車場に着いたときには寒冷前線通過のための吹雪となっていた。本図さんは熊穴沢の山スキーの後天神平スキー場でのスキー、笹沢さんはスキーのパッケージテストの受験、高須さんはスキー場でのスキーの特訓、我々は芝倉沢の山スキーとばらばらの予定である。いつものように車内で宴会の後、2時に私と告君は登山指導センターに移動し就寝体勢にはいるが、明日はどうせロープウェイで上がるんだからと小宴を続け、結局寝たのは4時過ぎだった。8時前のロープウェイに乗り天神平へ。天神尾根を登り肩の小屋に着く。この辺りから雪は積もっていないが昨夜の寒冷前線通過による気温の低下のためか雪面は非常に硬くなってきた。谷川岳（トマの耳）を少し下ったところで、アイゼン、ピッケルが必要な雪面の状態になった。しかし、私はそれらを下館の集合場所に止めた車の中に置いてきた。告君に聞くと出発時にザックから取り出し忘れたアイゼンがあるという。告君の持っていたナイフに内蔵のドライバーで私の靴に合うように調節し、右の足に片足ずつ二人で装着し、先に進むことにした。右足のアイゼンを利かせ、両手に持ったあまり刺さっていないストックでバランスを取りつつ、左足での数回のキックでステップをきるが、雪面が硬くなかなかステップか切れず苦勞する。そうこうしている間に、告君が片方のストックを落としてしまった。そのストックは雪面を止まることなく滑り落ち、視界から消えてしまった。苦勞してオキの耳まで進む。天気が良く日が当たっているのに、雪面が緩む事を考えて、ここでお茶を沸かして時間調整する。後続の二人パーティは（も？）、アイゼン、ピッケルを持っていないらしく、キックステップのみで近くまでは来たが、結局引き返して行った。慎重にアイゼンとキックステップの変なリズムの雪上歩行の後、芝倉沢への滑り込みの地点に着いた。肩の小屋から4時間近くもかかってしまった。さっそくスキーを着けて滑り込む。すり鉢状の芝倉沢上部は北面のためか、洗濯板状態の氷の板になっていた。告君はストック一本で器用に滑って行く。私はエッジを取られて転んでしまい、止めるのに苦勞した。沢が狭まったところからは今度はデブリの為に滑走領域が狭まっているし、さらに所々に吹き溜まっている新雪の腐った雪の為に、快適ではないスキーとなる。芝倉沢出合の辺りで沢からそれて虹芝小屋に向

かう。ここから川の右岸の基本的には緩い下りを、途中数回の壺足での登りを交え、下る。ロープウェイの駐車場が右岸に見えた所で、スキーをはずし登り返して駐車場に出て終了。今回は雪面の状態が非常に悪かった。

コースタイム

天神平(8:30)－肩の小屋(10:00)－芝倉沢上部(13:25-13:40)－虹芝小屋(15:00)－
駐車場(14:30)

(古山 記)



キジムシロ

久しぶりの完登、白馬岳主稜

1995. 4. 28~29

パーティ L古山正文 佐藤文則

すっかり走り慣れたR50～上信越道～三才山峠を越え大町にでる。前回、前々回と爺が岳北稜を目指したが、度重なる不幸によりまだ登っていない。

来年は必ず登ろう、悔しいから合宿を張って主稜も一緒にやろう等と言いつつ大町からさらに北を目指す。白馬の駅前でビールを買い猿倉に向かう。

道幅の狭まった林道を登っていくと案の定ゲートが閉まっている。一度諦めて車を止める地点を探すが、古山さんが鍵が空いているのを発見、そそくさと先へ進む。しばらく行くと再びゲートが出てくるが、今度は開きそうに無いので車を止めて仮眠する。既に空が白みはじめる。

何かの拍子で目が覚める。外は青空が広がる。急いで準備を始める。車を後に20分ほど歩くと猿倉の小屋に着く。かなり上の方まで車で上がっていたのだ。さて、ここで今回の失敗が判明する。小屋が開いていないのだ。何か装備を買おうとかいう予定は無いが、登山届けを出すはずだったのであてが外れる。仕方なく冬季入口の側に挿んで置いて出発する。ビールだけ買って登山届けの提出をすっかり忘れていた自分



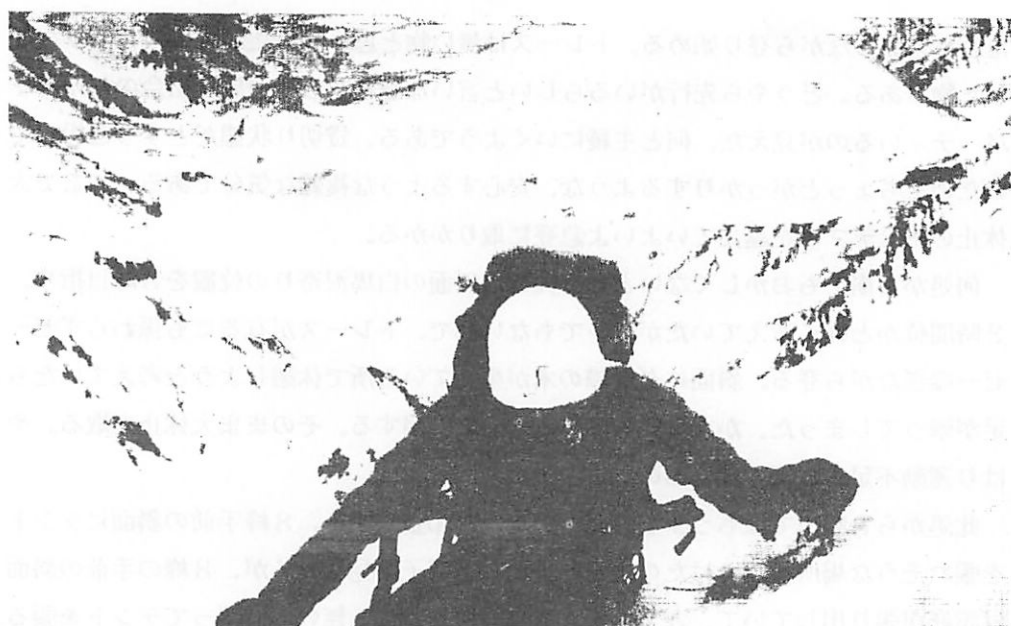
2峰手前にて・・古山

たちに苦笑しながら登り始める。トレースは無い物と思っていたが、かなりハッキリした物もある。どうやら先行がいるらしいと言いながら進むと白馬尻出合の対岸に1パーティいるのが見えた。何と主稜にいくようである。貸切り状態だとずっと思っていたのでちょっとがっかりするような、安心するような複雑な気分である。ここで大休止のあとデブリを越えていよいよ急登に取りかかる。

何処が雪崩もおかしくないという大きな斜面の白馬沢寄りの位置を8峰目指す。2時間位かと軽く考えていたがトンでもない話で、トレースが有るにも係らずゼーゼー喘ぎながら登る。斜面にダケ樺の木が生えている所で休憩しようと考えていたら、足が攀ってしまった。かなり長い間攀った様な気がする。そのまま大休止を取る。やはり運動不足か、情けないものだ・・・。

此処から8峰まではもう少しの様なので一踏ん張りする。8峰手前の斜面にテントを張れそうな場所を見つけたので荷物を置いて様子を見にいくが、8峰の手前の斜面は雪庇が張り出していて、とてもテントは張れそうにも無いので戻ってテントを張る。ゆっくりと休んでいると雪が降りだしてきた、先に進んだ先行を他人事に心配しながら酒を飲んで明日に備える。

朝起きると星がちらつくいい天気になっていた。準備を整え、薄明るくなるころ出発。昨日はグサグサに腐っていた雪も今はよく締まっている。緩む前に出来るだけ稼ごうとピッチを上げる。8峰の上に昨日の先行がテントを張っていた。7、6峰と難無く越えた。5峰の登りで雪が切れている所が有り、ザイルを出す。暫くは雪稜になるようなのでそのまま登る。所々腐った雪に足を取られながら順調に登る。一部でナイフエッチとなっているものの無茶苦茶急だと言うこともなく快適である。ナイフエッチの部分は大概よく締まっていて、アイゼンをキュッキュッと効かせながら進む。3峰の登りの途中で後続に抜かれる。3パーティ、計5人である。一人は単独で見ている間にも高度を稼ぎあつと言う間に間を開けられた。次は外人さんのパーティで、その次は学生風の二人であった。昨日の先行は随分とゆっくりしているらしく、かなり下の方に姿が見える。後続となり、少し焦ったのと、トレースができたのでコンテで登ることにする。3峰直下の登りはかなりきつい。2峰への登りは稜線どうしではなく、右手のルンゼを先行は選んでおり、我々もそれに続く。ルンゼは急で、時々先行の落とす雪があたって、とても痛く、怖い。ふくらはぎがパンパンに張るのを感じながら頂上直下に出る。傾斜が落ち、眺めがよく素晴らしい。先行が抜けるまでゆっくりと休憩する。さあ、後一登りである。気を引き締めてかかる。古山さんがトップで行く。途中で切る予定だったが、斜面が急で安定しないということなので、佐藤



最後の雪壁を乗り越す…佐藤

が途中まで登り、確保を続ける。

雪底は殆ど残っておらず、難なく頂上に出る。ぱっと視界が広がる。感動的な最後だ。写真を撮り、下山を始める。

村営小屋の前で雪が締まるまで時間を潰し、ゆっくりと、大急ぎで下る。途中支流のルンゼから小さな雪崩が来るので、大急ぎになってしまうのである。大雪渓を抜け、傾斜が落ちてからは本当にゆっくりと下った。

コースタイム

4/28 起床(6:00)－出発(7:00)－猿倉山荘(7:20)－白馬尻(8:40)－
休憩(10:20)－出発(11:00)－8峰直下(泊)(12:00)

4/29 起床(3:30)－出発(5:00)－6峰(7:00)－5峰(8:30)－3峰(11:00)
2峰(休憩)(12:00)－出発(12:30)－頂上(13:10)－
村営小屋(休憩)(13:10～14:00)－出発(15:30)－車(17:00)

(佐藤 記)

臆病風に吹かれて

1995. 4. 29~30

パーティ L高須 章、告 広道

28日 仕事を切り上げ、取手駅に高須氏を迎えに行く。本日で茨城を去る氏はセイセイした様子。

高須氏は小川山へは、一度きり、しかもバスで。私も何年前、甲武信ヶ岳に登る為に通った事があるだけなので道がよく分からない。

信濃川上で案内図を見ようと云うことになり駅に向かう。案内図で見当を付けていくがどうも様子がおかしい。けっこう走ったのに廻目平を示す看板すら出てこない。一応地図を出しチェックして見ると、私たちは1本手前の甲府に向かう信州峠に入ってしまう、だいぶ甲府より来てしまったことに気づく。夜遅かったので気分が萎えてしまうが気を取り直して引き返す。あいにく小雨もパラついて来ており、廻目平到着後そのまま車で寝る。

次の日、とりあえず雨は上がっていたので小川山でも登りやすいルートが集まっているリバーサイドと呼ばれる場所に行く。着いてみると、雨上がりだったので岩が濡れていてちょっとヤバそうな感じがしたが、とりあえず左から順に攻めていこうと、5, 9のルートに私がトップで取り付く。まあこんなもんかなあという感じで二人ともクリア。じゃあ、次は隣と思ったが5, 10dで刺激が強すぎると云うことで一番右端の5, 10bのルートを二本登り、新ためて5, 10dのルートに高須氏がトップで取り付く。なかなか厳しいようで、核心部で1度目の墜落。かなり粘りなんとか越えるが終了直前で再び墜落。ゲレンデなので舐めて素手でビレイしていた私は、手の皮を溶かしてしまった。

次にトップロープで私も挑戦したが、何度もテンションしてやっとクリア。高須氏がもう一度とトップロープで何度も核心を繰り返し登っているのを見て感心させられた。次に5, 10cのルートに私がトップで取り付いたが、ホールドに乏しいわ、ザイルは流れないわで、A0連発でやっとクリア。高須氏も何度かテンションして終了。時間も16時過ぎになっていたのでテント場に戻る。

ゴールデンウィークの初日と云うことで大学生のサークルらしきグループの笑い声を恨めしく思いながら、テントの中で男二人空しく女性の話などをした。雨が再び降り初め、けっこう強くなってきたので私はまた車の中で寝た。

30日も朝小雨がパラついていて、テントの中にもつまらないので、マラ岩周辺を見に行こうと、空身で向かう。ガレ場をどんどんつめて行き、結局ピークまで来てしまったが、それらしきものが見当たらない。高須氏が勘違いをしてしまったようだ。またガレ場を引き返す。マラ岩の周辺は凄い所にルートがあり、作った人達の努力に本当に感心させられた。一通り見てからテント場で昼食。この時間になると雨も上がり、岩を登っているパーティが見えた。『よし、登っている奴らがいると云うことはあそこは岩が乾いているはずだから行ってみよう。』登っているところが見えたルートは、小川山でも有名な小川山ストリーというルートで登れそうだったが50mザイル一本では届かないということなので、諦めて隣のスラブにある5, 10bの左上していくルートに高須氏がトップで取り付く。

ルート図では50mザイルでギリギリ間に合うはずだったのに、登ってみるとザイルが足りなくて降りられなくなってしまった。『下から登ってきて、サポートしてくれ』と言われたが、本日は嫌な予感がして登る気がまったくなかったので、フラットソールは車の中だ。『ちょっとこのルートは運動靴では無理です』と言うと、懸垂で降りるとのことで高須氏が準備を始める。支点を回収しながら斜めに降りてきた。核心の辺りであっという間に高須氏が横に振られ、岩のスラブの上で柔道の受け身の様なスタイルで転がっていた。『大丈夫〜?』『おお〜手を離したらヤバかった。』そこはテラスをはさんで下まで20m以上の高さがあり、エイト環の確保の手を離したらタダじゃすまなかっただろう。見ているほうも冷や汗をかいてしまった。ここからサポートして上に上がればこんなことにはならなかったのに本当に高須さんすみません。気を取り直して隣の5, 10cのルートに取り付くが、嫌なことは続くもので今度は支点のカラビナが錆びて開かず、再び懸垂下降になってしまった。ハラハラしながら見ていたが、今度はブッシュの中から岩のスラブに飛び出してきたので、また横に振られるのかと思ったが、『わざとやった』と平然と言い、高須氏の度胸に敬服させられた。このルートが終わったあたりで16:00過ぎになっていたので終了することに。このまま上高地に行く高須氏を信濃川上駅に送り、自分は帰途に着いた。

(告 記)

酒と登攀の充実した5日間（穂高・岳沢定着）

1995. 5. 3～7

パーティ L本図一統、佐藤文則、古山正文、告広道、坂本昭裕、高須章、所繁

3日、曇のち雨。朝寝坊により、高須との待ち合わせ時間を大幅に過ぎて、我々は上高地に到着した。バスから降りた途端高須が寄ってきた。想像していた様な『も、も、もとずさ～ん、なにしてはったんですか～。も、も、もうけ、け、け～へんと思いましたが、ほんまに～』というような言葉は高須の口から聞けなかった。後で分かった事だがサプリーダーを通して自宅には『8時に約束したのにまだ来ない。ほんとうに家は出たのか。交通事故に遇ったんじゃないか』と何回も電話があったそうである。高須よ心配してくれてありがとう。

今日は岳沢までなので、あわてることはない。ゆっくり行こう。でもビールがた～んと入ったザックはけっこう肩にくる。さらに途中から雨が降りだして気分はイマイチである。幕営地に着いた頃は本降りになっていた。いくら雨中でも宅地造成はきちんとやらなければならない。なにしろ5日間お世話になる所なのだから。テントに入てまずは落成祝いだ。俺みたいに、こんな合宿生活を何十年もしている者もいるし、初めてで緊張している者、いろいろだ。明日の天気は午前中位もちそうなのでアタックと決定。豊岩尾根は所、佐藤、高須。コブ尾根は古山、告。奥穂南稜は本図、坂本の3パーティ出動の予定だ。明日に備えて早々に就寝とする。

4日、曇のち夜雪。3時起床、他パーティより一足先に出発する。ヘッドランプたよりに取付へ急ぐ。なぜならば午後の悪天につかまる恐れがあるので、なるべく早く抜きたいからだ。取付までは見た目より長く息が切れる。先行パーティも後続パーティもない。我々二人だけだ。ベルグラの張った滝から取り付き、これを登り、上のバケツに出てそれを辿る。ピッケル、アイゼンが気持ち良く効く。尾根に出て滝沢側に回り込むとビパークパーティがいて、気持ち良さそうに寝息をたてていたが、我々の音に目を覚ましたようだった。急な雪壁を越すと、まもなくトリコニーの取付だった。まことに素晴らしい景色で、岳沢全部が見渡せ人気ルートであることがうなずける。ここで登攀用具をつける。他パーティと交信するが、いずれのパーティも順調に登っているようだ。トリコニーは実に容易な岩場で物足りない位だ。坂本もアイゼン履いての岩登りを十分堪能している。下を見ると後続パーティは遥か下にいる。凹角、フェース、リッジと快適に5ピッチのぼしザイルを解く。雪のナイフエッジから雪壁をし

ばらく登ると吊り尾根にでた。そこから奥穂高までは一投足であった。私は奥穂高の頂上に立つのはちょうど30年ぶりになる。30年前、初めて北アルプスに友人二人と共に来たときがあった。その時二つの目標があった。一つは槍穂縦走で、もう一つは前穂北尾根登攀である。槍穂縦走に成功した我々は、意気揚々と北尾根にアタックしたのである。恐い思いをしながらも持ち上げた麻ザイルを出すことなく、無事前穂に登頂し、奥穂からザイテンを下った。その時の自分は、エベレストにでも登ったと同じような（ちなみにエベレストに登ったことはない）満足感に浸っていた。当時、酒がまったく飲めなかった私は（最もまだ未成年だったが）、潤沢のテント場でスキムミルクを飲みながら、いつの日には屏風登攀をと夢見ていたのだ。あの時、30年間来ることがないなんて思ってもいなかっただろう。滝谷、屏風、奥又白と穂高には何十回も来ているのに、なぜか奥穂には登るチャンスがなかったのだ。その頃は頭ももっとフサフサしていたっけよ（本当だよ）。現在と30年前とを比べたくて写真を撮りたかった。出発直後に坂本に声をかけたが、風で聞こえないらしく、4～5回呼んだのだがスタスタと行ってしまった「坂本ちゃ～ん、それはないだろ～、ブツブツ、ま、いっか」。ロバの耳、ジャンダルムは縦走路としては確かに悪い所だ。しかし我々には緊張感が続いて、より一層充実した山行になった。よく屏風～前穂4峰正面から東壁～滝谷～北鎌尾根の継続登攀のことをパチンコと言う（昔は言った）。すると今日のは、ベビー逆パチンコと言ってもいいかな？なんてくだらないことを考えたりしながら行く。コブの頭を過ぎた所で昼岩パーティと合流し、お互いの無事を確認。握手のあとは登攀談義に花が咲く。時間があるのでのんびりテントまで下った。夕刻、望遠鏡を覗いていると南稜を下りている単独行者が目に入った。なんか足元がおぼつかない。すると目の前でその人が滑落したのだ。私は思わず「あららら……、落ちてる、落ちてる」と声をあげた。何十mか落ちて運よくブッシュにひっかかって止まった。そのうち立ち上がったので大丈夫のようだ。やがてしばらくして再び下り始めたが、先程よりもへっぴり腰で、見ていても心臓に悪く途中で見るのをやめた。当然、夜は宴会。今日の山行報告を肴に気持ち良く酔えた。夜、雪が降り出す。

5日、雪のち晴。3時に起床するとまだ雪が降っており、10センチ以上積もっている。本日は停滞と決め、またシュラフにむぐり込んでしまった。昼前から急に晴れだしたので、表にシートを敷き昼間から酒盛りを始める。こういうのもまた実に楽しい。これが下界に下りてから仕事への活力になるのだ。明日は天気も最高だろう。クラブとしては、予定していた3つのルートに登ってしまったので、全員自由行動にする。つまり各自登りたい所に行けば良いのだ。ミーティングの結果、コブ尾根に本図、

佐藤、坂本の3名、南稜に古山、告、高須、所の4名が行くことになった。

6日、快晴。コブ尾根取付に向かう。快調に飛ばし、途中2パーティ追い抜きトップになる。コブ沢からマイナーピークに出るまでの雪壁は、アキレス腱が痛くなり、かなり長く感じた。マイナーピークからの下りはザイルで確保する。こういう雪の斜面の下りになると、各々どのくらい雪になれているか一目瞭然だ。南稜の時から感じていたが、坂本は山の経験はあまりないが、雪に対してのなれはたいしたものである。非常にバランスがいい。恐怖心などないんじゃないかと思われる動きである。これは恐らく競技スキーによって培われたものであろう。マイナーピークを下り、ザイルを仕舞っていると後続パーティがやってきた。いつも思うことだが、やはりトップは気持ちがいい。ルートは自由に選べるし、待ち時間が無いのが最高だ。今までの経験によると、自信のないパーティほどトップを嫌う。確かに自分達で、いろいろ判断しながらルートを切り開いて行くよりは、先行パーティがザイルを出した所でザイルを出し、先行パーティが登った所を登り、先行パーティが行き詰まったら別な所を登り、先行パーティがザイルを仕舞った所で自分達も仕舞う。そして先行パーティがまたザイルを出したら、慌てて自分達も出す。この方が気が楽に決まっている。いつもこんな山行ばかりだったら進歩は望めない。うちのパーティに限っては、意識的にトップを嫌うようなことはないと思っている。少しの登りでコブ岩の基部に到着。コブ岩は2ピッチで抜ける。これも南稜のトリコニーと同じようにまったく容易で2級の登攀だった。一昨日登った古山の話では、4級上の登攀だとの事だったが登ったルートが違うようだ。15mの懸垂下降の後、けっこう急な雪壁を登る。総合的にいえば南稜よりコブ尾根のほうがグレードは少々上であろう。稜線で交信しながら一時を過ごし、天狗沢を駆け下りる。今日も行動は午前中で終わってしまった。本日も表にマットを広げ酒盛りがはじまる。きっと知らない人は、毎日まいにち、こいつらは山も登らず、真昼間っから酒ばかり飲んで何やってんだろう、と思っていたにちがいない。夜は、打ち上げということで、かなり盛り上がった。持ち上げた酒類はもう既に空っぽ。古山と坂本が岳沢ヒュッテに行き、ビール、ワイン、ウィスキーを差し入れてくれた。お二人には気を使わせてしまって、たいへん申し訳ありませんでした。予定ルートを消化し全員無事だったので、かなり気分の良かった私は、つついとおバーペースになり、口も良く回らない状態であった。前述したが、私は若いころは酒は全然だめだった。ヨーロッパに行ったころは(24歳)、相棒達がビールやワインを飲んでいても、私はいつもミルクだった。フランス人に子供だといつもバカにされたものだ。それが沢登りをするようになってから、だんだん飲むようになってきた。焚火をしながら飲

む酒の旨さは格別なのだ。今では少しではあるが毎日飲むようになった。でもこんなに酔っぱらったのは何年ぶりになるだろうか。きっと、前回の岳沢合宿以来だ。どうも私は岳沢に入ると、飲み過ぎてしまう傾向があるらしい。しかし、当会が岳沢で合宿をすることは当分ないであろう。

7日、晴れ。岳沢定着の良さの一つに、アプローチの短さがよく言われるが、私も同感である。反面、ルート数が少ないのが残念に思われる。ゆっくり起きて上高地に下りる。昔は上高地というと帰りはバスに乗るのが大変で、整理券を発行した上、2～3時間待つのが普通だった。ところが今は待つということがほとんど無い。道が良くなったためバスの本数が増えたためか、バブルの崩壊で観光客が減ったのか、いずれにしても我々登山者にとっては嬉しいことだ。

高須は今回の合宿を最後に当会をやめる。大阪に帰ることになったのだ。高須とは短い付き合いであったが、一風変わった奴であった。私とはアルパインクライマーとスポーツクライマーの違いか、意見のあわないところもあったが、なんか憎めない奴でもあった。山での再会を期しガッチリ握手、上高地で別れた。後はいつものごとく、鹿教湯温泉で一風呂浴びて、思ったより空いている道を茨城に向かった。



95' 春合宿終了・カッパ橋にて

高須、古山、坂本、本図

所 佐藤、告

コースタイム

5月3日上高地(10:21)－岳沢(13:00)

5月4日テント(4:18)－南稜取り付き(5:01)－トリコニー下(6:00~6:20)－稜線(8:53)

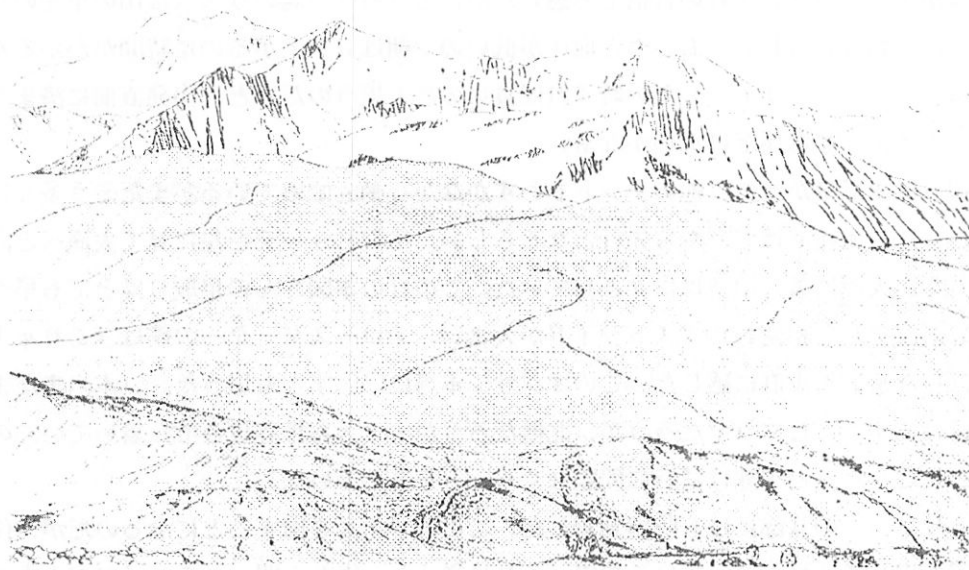
－奥穂高(9:06~9:17)－ジャンダルム頂上(10:00)－テント(12:50)

5月5日停滞

5月6日テント(3:59)－コブ岩頂上(7:13)－稜線(8:36~9:10)－テント(10:49)

5月7日不明

(本図 記)



春合宿一奥穂高南稜

1995. 5. 4

パーティ L 本図一統、坂本昭裕

岳沢のベースキャンプから南稜の象徴ともいえるトリコニーが、何とも言えないたずまいを見せてくれていた。ベースキャンプは午後には雨が上がり、どうやら翌日は絶好の登攀日和になりそうだと感じた。南稜のパートナーは本図さんとのこと、手間をかけないようについていくのは勿論だけど、何か盗めればなあと期待に胸をふくらませていた。

夜のミーティングで本図さんから『おう！坂本よ～。シュラフカバー入れとけよ』と言われた。5月とはいえまだ山では時折雪の降る季節、ビパークの用意である。ふくらんでいた胸が小さくなった気がした。ルートの説明によれば、どうやら稜線まで抜けるのに時間がかかるとのこと。当会のとあるパーティが南稜でビパークした経験があるらしい。詳しいことは聞いてないけど、なんかの理由で出発時間が遅かったからだろうと推測した。いずれにしても油断は禁物だと思った。

翌朝テントを出たのは、4時15分頃だった。出発前にキジを打ちに行くがさほど結果が出なかった。1月の合宿でも感じたが、どうも僕の腸のリズムは山の早発のリズムに合わないらしい。もともと血圧が低いので朝は立ち上がるのに時間がかかるんだけど……。まあ、したい時すれば良いのだと思うのだけど、出発直前に済ませたいと考えるのは僕だけなのかなあ。

辺りはまだ暗かった。他のテントもわずかながら動き始めているがまだそう多くはなかった。南稜ではどうやら先行となるらしい。岳沢ヒュッテを左に見て大滝へと向かった。大滝に着く頃空は白々としていた。この日の本図さんの足取りはとても早く感じた。そして相変わらずストライドが大きい。スロースターターの僕は『こりゃ！やばいなあ』と正直に感じた。このオジサン本当に〇〇才とも思った。（本当はまだ行けますよ、ヒマラヤだろうが、北壁だろうが・・・お世辞抜きで）着いていくのに必死だったことを除けば特に問題なくルートを進んでいた。

トリコニーの基部には6時頃到着した。ここでザイルを出すことになるのだが、僕の腸も出してくれと言っているんで、それに従った。後から聞いたらハイマツの中で白い紙が風に流れるのが見えたそうです。降参して旗を振っているように見えたのかなあ。トリコニーは簡単で難なく通過した。一カ所雪のリッジ状の所で、たまたま風



奥穂南稜…トリコニーを登る坂本

があり少し慎重にならざるを得なかった程度である。下から眺めているよりは随分楽な場所であった。後は稜線までぐんぐん雪稜を登った。奥穂山頂には8時過ぎには着いていたと思う。山頂は風が強かった。後ろを歩いていた本図さんの声も聞こえなかった。後から聞いたのが本図さんは奥穂の山頂は何十年かぶりだそうである。それで記念の写真を僕に撮ってほしくて声をかけたが、僕はそそくさと歩いていったそうである。何だ～それならそうと早めに言ってくださればなあ～。山頂の女の子にお願いして（ナンパとも言う）記念の一枚でも撮れたのに、逆に僕ばかり写してもらっちゃいましたね、すみませんでしたね。

山頂で軽く休憩した後は、ジャンダルム経由で天狗沢から岳沢に向かった。下山ルートからは乗鞍や御岳が絶景であった。途中豊岩尾根パーティといっしょになった。彼らも順調だったようである。結局テントに着いたのは13時前だった。いったい？何処でビバークするのかと思うくらい順調な山行であった。

コースタイム

5月4日 テント(4:18)－南稜取り付き(5:01)－トリコニー下(6:00~6:20)
 －稜線(8:53)－奥穂高(9:06~9:17)－ジャンダルム頂上(10:00)
 －テント(12:50)

(坂本 記)

コブ岩尾根

1995. 5. 4

パーティ L古山正文、告 広道

何時ものことながら、血圧の低い私は夢うつつのまま、古山氏と早朝4時25分、南稜に取り付く本図&坂本パーティの出た直後にコブ尾根の取り付けに向かう。テント場には沢山の人がいたが、本日コブ尾根に取り付くのは私たちが最初のように、踏み跡が無くアーだコーだと迷ったあげく尾根の末端、小屋の裏から取り付くことにした。最初から傾斜がキツイので結構辛い。おかげで目が覚めた。

尾根に入ると右に南稜を目指す本図氏達が見えた。鋭いナイフリッジ、キノコ雪などを越えた辺りで左下の沢に幾つかのパーティが登ってくるのが見えた。どうやら末端から取り付くのは素直すぎたようだ。沢から稜線に飛び出してきた2パーティに抜かれてしまった。しかしキノコ雪の所を越えられず、巻き始めた2パーティを尻目に私たちはそこを下降し再び先行する。その頃には左に壘岩尾根に登っている所、佐藤、高須パーティも見え出した。

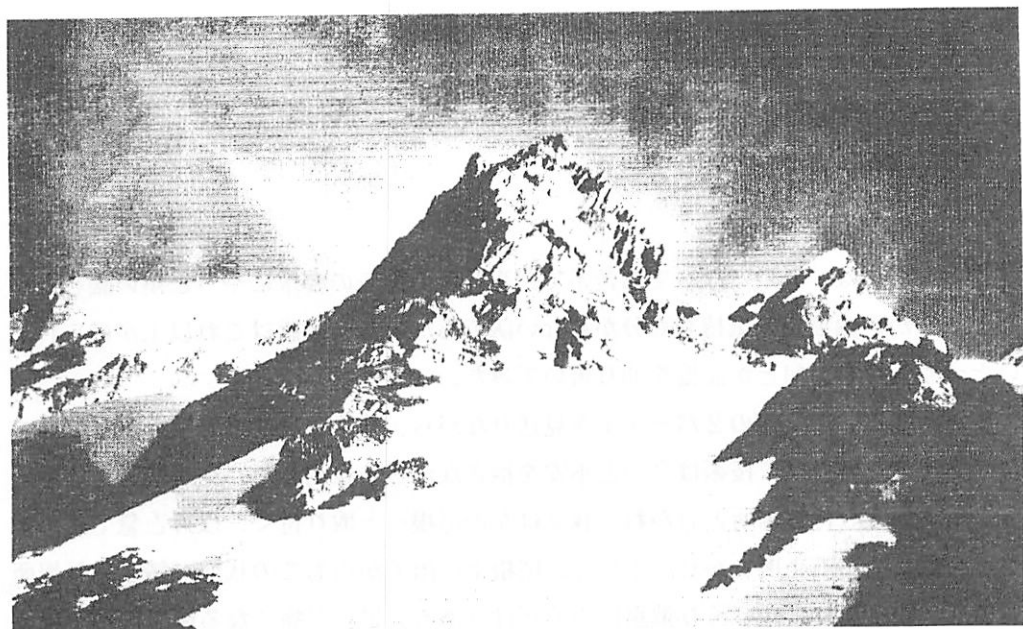
そうこうしてコブ岩の基部に到着するが何処に取り付きか判らず、かすかにある踏み跡を頼りに巻いて行くと、岩に取り付けそうな所があった。そこを左上して行くとテラスに出た。そこにはハーケンの支点が何ヶ所もあり、ここから古山氏がトップで岩に取り付く。ルート図にはここは何処でも登れて3級程度とあったが、支点はグラグラだし、下はすっぱり切れていてけっこう高度感があった。

古山氏はけっこう苦しそうに登っていたがハーケンを1本打ちだし、何とか通過。

次に私の番だが、岩の末端より取り付いた後続パーティが私に居るテラスに登ってきたので、支点を譲り登り始める。アイゼンを履いてのこのピッチは苦しい。古山氏に確保されてやっと通過。この後二人で話し合ったのだが、このピッチは少なくとも4級はあるピッチだと思う。下を見ると岩を巻いているパーティが見える。

次に私がトップで登るが、問題の無いピッチで難なく通過。次に15mの懸垂を行ない大休止。ここでまた後続パーティに抜かれる。行動食を食べ、私達が登り始める頃には岩を巻いてきたパーティが懸垂下降を始めていた。

しばらく登っていくと大きなキノコ雪があり、先行パーティが『これは越えられないよ〜』と言うので、巻き道を探し始める。ちょっと岩がグラグラしているが、行けそうな所を見つけ巻いて行くと、啞然としてしまった。裏から見ると越えられないと



コブ岩を望む

教えられた所が、何とか行けそうだったのだ。教えたパーティを恨みながら、また先行を抜き私たちがトップになる。

もうこの時点で南稜パーティは昼岩尾根パーティと合流して天狗のコルにおり、自分達だけ終了していないのでけっこう焦って急な雪壁を登る。

12:45、やっと稜線に抜けた。奥穂、西穂などをバックに写真を撮り、帰途に着いた。途中下降ルートを見失ったりしたが天狗のコルに13:40。テント場には15:30無事到着。

(告 記)



畳岩尾根

1995. 5. 4

パーティ L 佐藤文則、高須章、所繁

苦手なものは、いつになっても苦手で、生井氏の再三の要求にやっと重い腰を上げたとか、編集長の気持ちも分からない訳でもないし、迷惑はこれ以上かけられないとかいう気持ちで何とか記憶を辿り書いてみた。

まだ薄明るい中、他の2パーティを見送りながら、我々も身仕度を整え久しぶりの頂へ向かう。体力は、技術は?…と不安を抱きながら歩き出した。空が明るくなる頃、コブ尾根の取り付け場所と分かれ、我々は左の尾根へと取り付く。以外と急で硬い雪に足を蹴り込んで高度をかせいで行く。尾根上に出てもこの状態が続き休む場所もなく、ゆっくり、ゆっくり慎重に歩くだけである。足首が痛くなる頃、山頂が見え隠れし、元気が出る。風の強い頂で一服し終えると、南稜パーティと合流し天狗沢を下った。登ってきた安堵感と疲労でその夜はぐっすり眠れた。

(所 記)



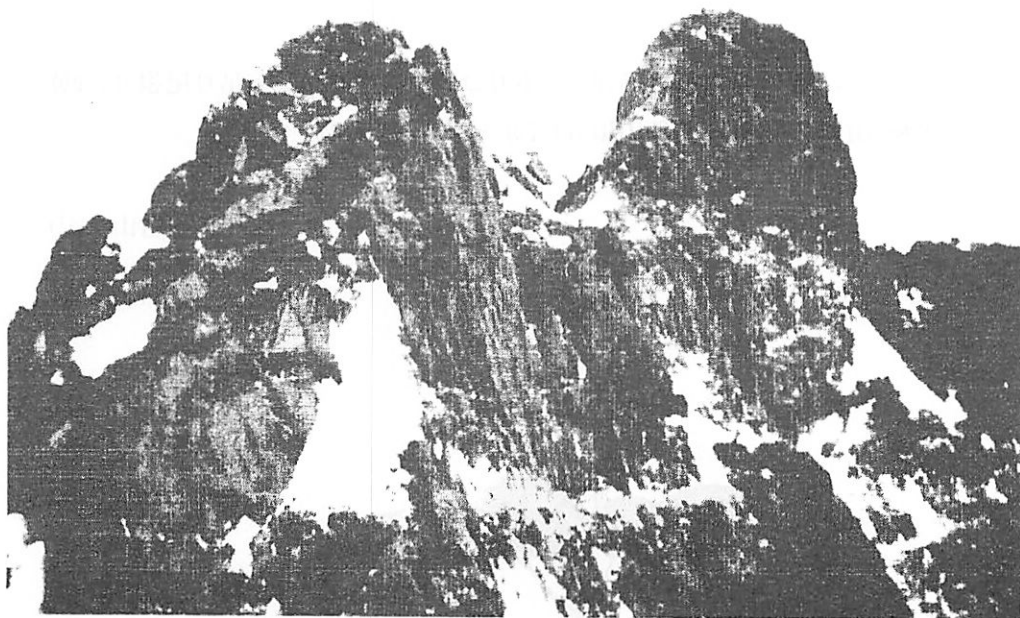
コミヤテカタバミ

1995春合宿 奥穂南稜

1995. 5. 6

パーティ L所 繁、告 弘道、高須 彰、古山正文

朝4時にコブ尾根パーティに続いて出発。南稜の末端で登攀の準備をし、大滝の方ではなくコブ尾根側の沢を200メートル程登ってから取り付く。2パーティ程が大滝の左のルンゼから取り付いている。這松帯をぬけ雪稜となり右にトラバース気味に登り、大滝左のルンゼの途中に合流する。ここで1Pロープをだしルンゼをぬけ、右の雪稜を登る。大滝の上となる右下のルンゼには昨日の南稜下降パーティの足跡がついていた。トリコニー前の数メートルの雪壁で順番待ちとなった。以後トリコニーを抜けるまで続いた。陽が射しはじめ、一昨日積もった雪がダンゴとなってアイゼンに付着し、いやらしい。我々もここでロープをだし、雪壁をダブルアックスで抜け、トリコニーの基部に着く。2P登ったところで8時の無線交信。コブ尾根パーティはコブ岩を既に越えたいらしい。更に2P登って、9時の交信。3P登ってトリコニー直後のナイフエッジを越え、ここでロープをしまう。後は雪稜を踏み跡を追って登り、吊り尾根に抜ける。天気がよくいので、吊り尾根を下ることに決定。ザックをデポし奥穂



奥穂南稜・ジャンダルムを越えてBCへ

の頂上を踏みに行く。記念写真を撮ってから下る。左手下には涸沢がよく見える。所々に雪崩の痕が見える。一昨日か、今日のものか？ 涸沢のテントは連休の終わりのためかだいぶ少ないみたいだ。吊り尾根の鞍部をすぎ、少し登り返した辺りで、前穂頂上を通らない夏道のトラバースルートにそれてしまった。仕方なく、トラバースを終えたところで、前穂山頂を踏むかこのまま下るかみんな迷ったが、せっかくだからと夏道の岩稜を登り返す。前穂山頂で写真を撮り合う。下りは奥明神沢の科尔へは向かわず、山頂から奥明神沢の中間部に合流するルンゼを下る。硬い雪面の上に積もった一昨日の雪のため、アイゼンの歯はその硬い雪面には届かずダンゴ状になってつるつるすべる。さらに傾斜がきつくなっている部分があり、ルンゼの下まで見通すことができない。所隊長の命令で、途中から逆向きになって下る。完全に氷化している部分もあったりして結構疲れた。奥明神沢に合流して、アイゼンを外したりしていると、奥明神沢上部から大きな岩が転がり落ちてきた。7～8人のパーティが今下り始めたばかりである。“ラ～ク！”と大声を出す。我々の前を通りすぎた所で大きくバウンドし、パーティの最後の人からそう遠くない所でズボッと雪の中に埋まって止まった。上からの落石に気を付けて、我々も下る。テントでは、待ちくたびれて夕食の準備迄しておいてくれたコブ尾根組と無事の帰還を祝い、合宿の打ち上げの宴会へとなだれこんだ。

コースタイム

テント (4:00) - 取り付け (5:00) - トリコニー途中 (8:00) - 吊り尾根 (11:00) -
奥穂 山頂 (11:30) - 前穂山頂 (14:20) - テント (16:10)

(古山 記)



ベニバナイチヤクソウ

春合宿 奥穂高岳 コブ尾根

1995. 5. 6

パーティ L本図一統、坂本昭宏、佐藤文則

5/5が雪で行動中止となり、午後からは目一杯酒を飲み休養は充分である。今日は岳沢ベースでは一番難しいというコブ尾根にアタックである。ヘッドランプを点けて登りはじめると先行が沢山いるような感じである、ややピッチを上げて、小屋の前をすぎ、取り付けのルンゼにむかうと、此処の先行は2パーティ位の様だ。中程度の斜面を一步一步登り、先行を抜く。稜線へのルンゼの下で休憩を取るものと考えていたら、やはり“飲まない、食わない、休まない”の休まないで一気にルンゼの上まで抜ける。抜けた所が下降点で、ザイルを出して下降。坂本さんはこっちが怖くなるくらい怖がらず行動する、羨ましいけど、やっぱり怖い。ギャップを越えて、少し上がった所で無線と休憩。1ピッチ分くらい登った所で急なルンゼに突き当たりザイルを出す。1ピッチ登ると大きなテラスに着く。そこから左に5m位トラバースしてカンテ状のところを登る。ホールドが大きく、しっかりしていてとても快適に登る。登り切ると殆ど頭で一旦ザイルをしまい、とことこと歩いて行くと直ぐに懸垂点にでる。急で、一部



コブ尾根に登る佐藤

切れた斜面を懸垂下降で下りる。もうコブ尾根の頭はすぐそこである。頭の手前で交信。向こうは渋滞で止まっているとのこと。ご苦労さま。

豊岩尾根の頭まで進んだ所で再び交信。後は一気に天狗沢を駆け降りて、無事終了。

今回のおまけ・・・南稜パーティーがなかなか帰って来ず、とっても心配しました。

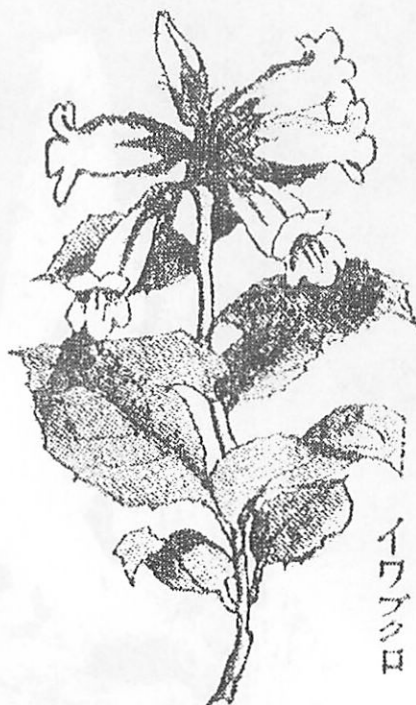
詳しくは南稜パーティーの記録を読みましょう。

コースタイム

起床(2:30)－出発(4:00)－下降点上(6:00)－コブ尾根の頭(8:00)

－豊岩尾根の頭(9:00)－テント場(11:00)

(佐藤記)



御神楽岳・湯沢・高頭スラブ

1995. 5. 21

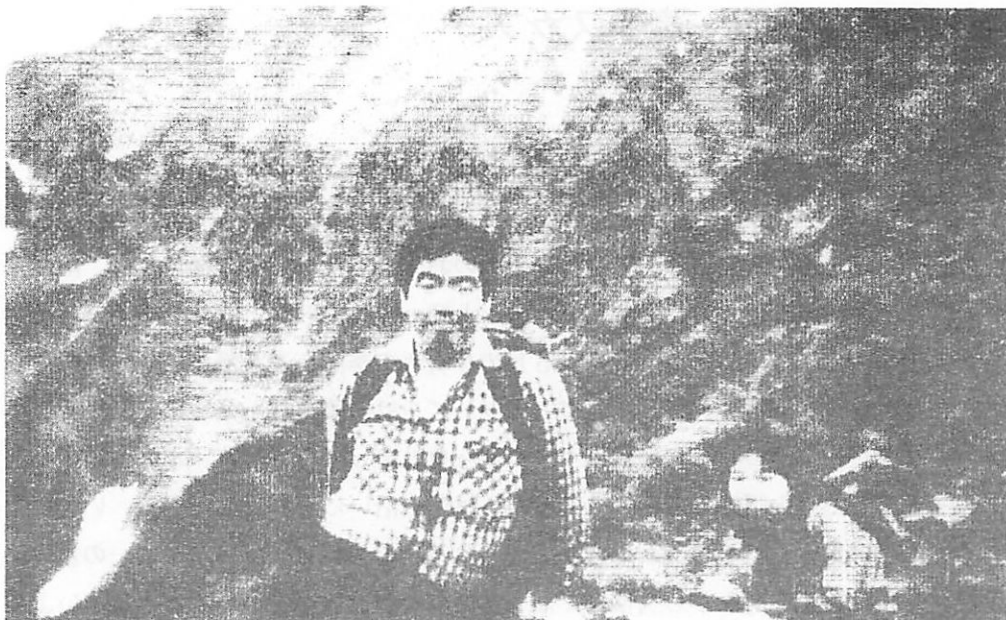
パーティ 日本図一統、古山正文、笹沢ひろみ

天気予報は午後から崩れると云うことで朝のお天気も今一つパツとしない。雨が降りだすのも時間の問題だし、それならとっとと登ってしまおうといった調子で4時25分に出発。広谷川沿いの森の中は、5月の芽吹きの子節を迎え優しい緑が周囲を包みまさに森林浴を満喫できる。そしてこのシーズンは山菜採りも楽しめる。まさに美味しい季節だ。アプローチの道程もキョロキョロと葉っぱを見たり、本図さんのレクチャーを受けたりと退屈しない。スモ平からは湯沢沿いに進み雪溪を登る。いよいよ前方にはこの地方独特の荒々しい岩肌が現われる。迫力が有って谷川岳の一の倉のようだ。そんな景色を見ながら雪溪をぐんぐん高度をかせぎ途中から右に入る。いよいよ取り付きだ。ここでザイルを付ける。小雨が気になるが8ピッチで終了。傾斜の緩



高頭スラブを登る笹沢

い順層で楽しかった。私はフラットソールを履いていたがベテランのお二人は必要ないなあと思ったことでしょう。なかなか快適なスラブだった。下山ルートは栄太郎新道を下りたが、ここは眺めが良い尾根だった。途中奥壁スラブのルートの説明を聞いたり、日本カモシカ?とも遭遇し感動した。



英太郎新道にて

そして私達は次の目的である山菜取りをスモ平周辺で行なった。ザックを下ろしビニール袋片手に思い思い山の中に入って行った。

集めた山菜はうどんの中は入れて豪快に食べた。カタクリ、ギボシ、ミズナ、コゴメ etc、大変おいしくいただきました。今回も貴重な経験が出来、充実した山行だった。帰りは御神楽温泉で汗を流して帰りました。

コースタイム

5月21日 駐車場(4:25)ー湯沢出合(5:18)ー取り付き(6:02~6:20)

ー終了(8:44~9:13)ー出合(10:43~11:30)ー駐車場(12:28)

(笹沢 記)

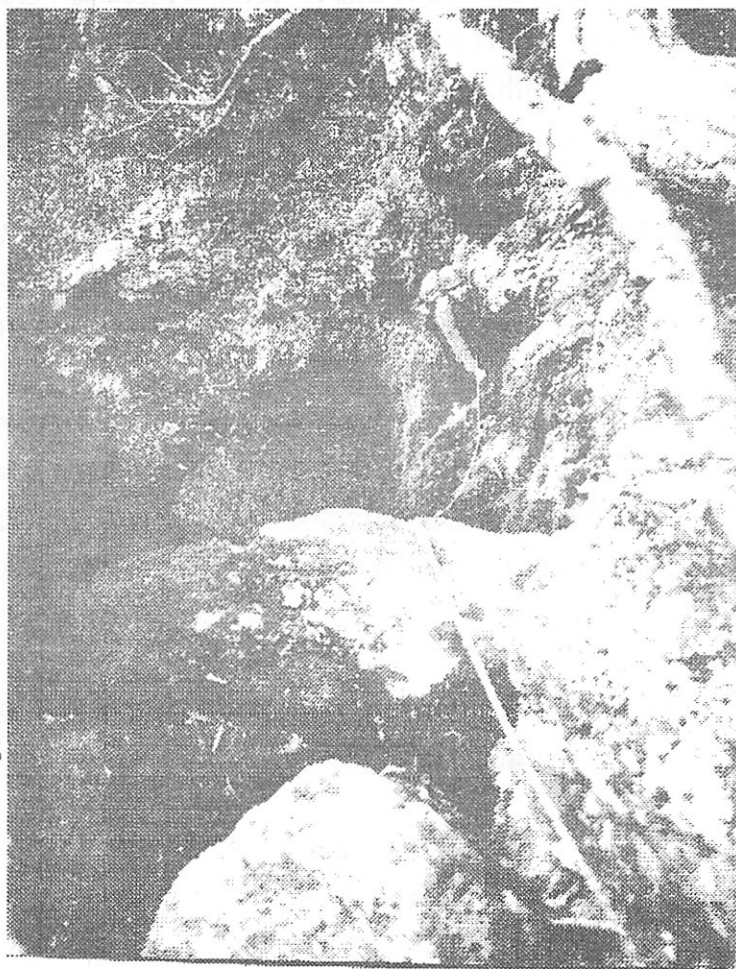
奥多摩・小川谷犬麦谷・割谷下降

1995. 5. 28

パーティ L本図一統、菊地光夫

夜、21時に下妻の市役所に集合して一路奥多摩にと向かう。いつもは50号を良く利用するが、R16号の利用は久しぶりである。土曜の夜なので、前の車や後の車も次々とファッションHOTELに入っていくようだ。当方は連れが硬派の本図氏であるからとてもとても……。車は奥多摩・日原を越え、林道の終点まで入っていく。そして車を止め就寝。

翌朝5:45に出発。林道を約20分位歩き、犬麦谷の取り付きに着く。犬麦谷は奥多摩の小川谷の中では最大の滝を持つ沢だと本図氏が言っていた。10分も行くとタツマの滝下に有るチムニー状の15mの滝に出会う。その滝は直登して行くがタツマの滝50mは直登出来ず、右側に大きく高巻き沢に戻る。高巻きは急で部分的に岩になるので注意して登る。タツマの滝を越えるとナメ滝が続き、モリノ窪瀑流帯が始まる。中程にある25mの滝、瀑流帯出口の10mの滝も全部直登で越えて行く。(実際には水量、沢の長さ、スケール等を東北の沢



犬麦谷を登る菊池

と比べると大人と子供ぐらの違いがあり、本図氏には役不足である。)これより上部にはなおも滝が続くが容易に越せる、やがてガレ場となりヤブを15分~20分位つめるとゴンバ尾根に出る。そこで少し休憩を取り、登ってきた反対側の沢、割沢を下降する。取り付きは林道を1分位歩き左側に下る。

下り口はブッシュ帯もなく、難なく沢へと向かう事が出来る。20分も下ると沢の回りに、天然のわさびが一杯あるではないか、早速ザックを置き少々いただく。タダで採れるとなると本図氏の本性が目覚める。スーパーの袋を両手にぶら下げて満足の本図氏であった。でも実際はわさびの根が1cm位しかなく、クズ同然である。葉の所を“おひたし”になんてアドバイスを受けるが、硬くて駄目である。本図氏は、近所にあの大きな顔をもっと膨らませて、おすそわけをしたんだと思う。もらった方もとんだワサビだと驚いていたと思う。後日、本図氏に聞くと彼1人はうまいうまいと食べたそうだ。当方は1本は食べたが、残りは全部捨てた。沢をなおも下降していくと、15mの滝が出てきたので、ザイルを出し懸垂下降をし下る。沢の近くにワサビ田が3枚ほど有ったが、廃田になっており荒れていた。ここでも本図氏はワサビを採っていた。彼はタダのものと山にだけはまめであることが分かる。

これより、林道まで約40分難なく下降し、林道の手前で先ほど採ったおみやげを人目に付かないようにザックに押し込める。それより登山道を30分歩き山行は終了した。山行終了10:50。時間が早いので学園サウナで一杯やろうと言うことになる。

本図氏はタダと山とサウナが大好きだと言う事でサウナのチケットはいつも財布の中に何枚か入っているようだ。そんな訳で、私も一番好きなタダで入浴することが出来た。本図氏は金持ちだから山で早く下りたときは皆さん一度サウナへ誘ってみてはいかがでしょうか?。勿論チケットを出してもらいたいタダでネ!

コースタイム

5月28日 駐車場(5:21)ー出合(5:50)ー水源林道(7:39~7:49)ー割沢出合(10:22)ー駐車場(10:49)

(菊地 記)

豆焼沢

1995. 6. 25~26

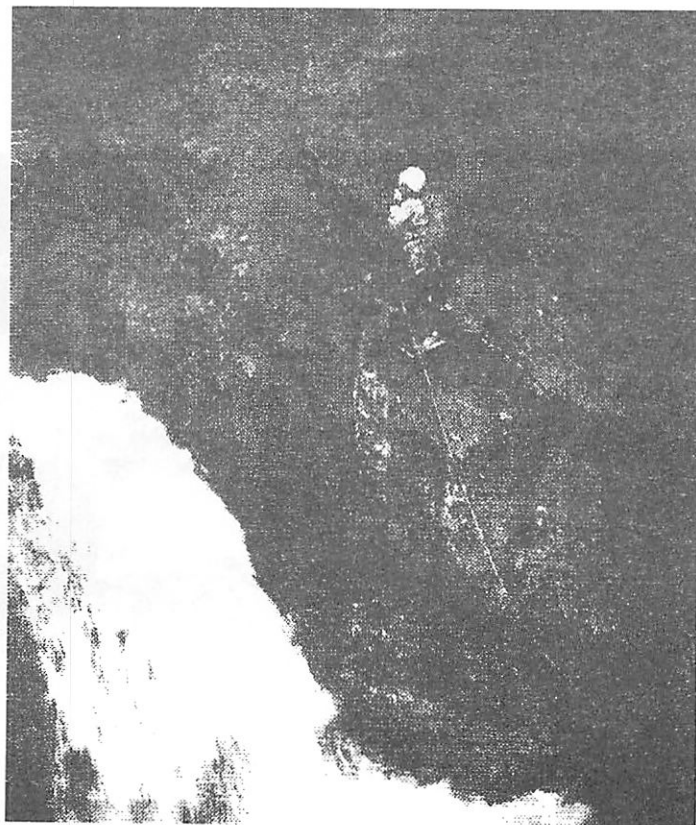
パーティ L 本図一統、古山正文、告広道

下妻に集合し、一路秩父を目指す。途中、車の中で谷川岳の話題になり本図氏の登ったルート数は幾つ有るか聞くが、いくらでも出てくるルートの数には圧倒されてしまう。やっぱり凄い。

深夜140号のどんずまりに有るトンネルの模型の有る公園で少々酒を飲み、テントは張らずに模型の中で寝る。

早朝、工事のゲートを越え豆焼沢の右手を下り沢に入る。水が結構冷たい。F1の左を登り、トウガク沢の流れ込み付近に有るF2の左を高巻く。F3の右手に古山氏トップで取り付く。岩が濡れていて、けっこう悪いらしく時間がかかる。日陰でおまけに滝の水しぶきがかかるのでビレイしているのが辛い。

私はあまり沢に入ることが無いので、ほかの沢と比べる事が出来ないが、話しによると水量が多いらしい。いくつもの滝を越え、もうFいくつか分からなくなってしまうがルート図上では4段25mの滝で2度目のザイルを出す。古山氏トップで直上を試みるが、沢用の靴では無理なようであった。右の草付きの中に残置ハーケンが有ったので、本図氏がトップで抜ける。次に出てきた2段ナメ滝=40m×80m簾状の滝で本図氏に写



F3を登る古山

真を撮ってもらう。ルート図には美滝と書いてあるがその通り本当に美しい。小さなゴルジュが続き、程なく雁坂小屋の水源に出る。そこで大休止。休息の一時、山菜の講義を聞く。その後、雁坂小屋から豆焼橋に続く長い登山道を下っていくが、ず〜っとビクついていたことが最後の最後に起きてしまう。私は沢登りは嫌いではないのだが、何故余り気が進まないかと云うと沢には蛇がいるからである。豆焼橋を渡り舗装してある道に出たのもういないだろうと思っていたのに道を渡っている途中に出くわしてしまった。意地の悪い2人はヤブに逃げた蛇をまた引っ張り出そうとしている。それを見た私は一目散に急いで逃げた。そして途中温泉に入り帰途に着く。

コースタイム

6月11日 車(5:54)ー豆焼沢(6:11)ートウガク沢出合(6:56)ー昼食(10:35~10:57)
ー縦走路(12:04~12:31)ー雁坂小屋(12:47)ー車(15:21)

(告 記)



美しいナメ滝にて・・告&古山

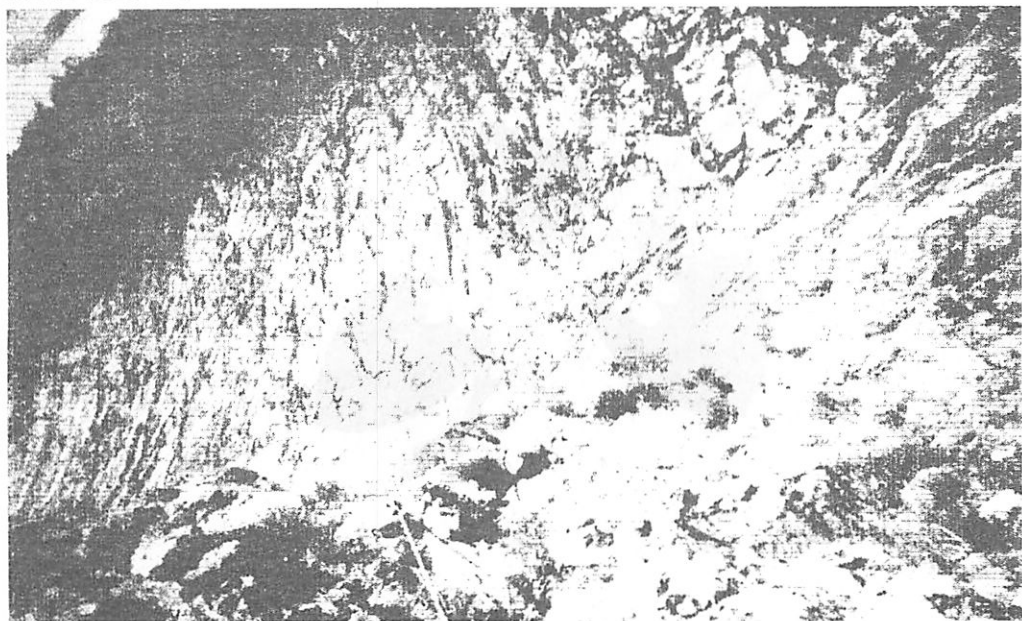
一の倉沢・烏帽子沢奥壁中央カンテ・ルート

1995. 6. 18

パーティ L古山正文、佐藤文則

前夜、下館市役所に集合。佐藤君は購入したばかりのイスズ・ビックホーンで現われた。今後大活躍しそうである。渋川・伊香保から水上まで高速を使い、時間をかせいだ。午前零時過ぎに一の倉沢の出合に着き、軽くビールを飲んで就寝。

4時起床。朝食後4時半出発。出合の直ぐの所から雪溪の上を行く。テールリッジに200メートル位まで近ずいた時、右手の衝立スラブから雪のブロックが大きな音とともに崩れ落ちてきた。歩みを止め、転がってくるブロックを見切りながら慎重にかわす、当たったらひどいだろうなどと考えながら急いでテールリッジの岩に取り付いた。中央稜基部で登攀の準備をして取り付きに移動する。しかし、すでに1パーティが登り始めていて1パーティが順番待ちをしていた。3番目かと思ったら更にその上に2パーティが見えるし、凹状岩壁にも1パーティすでに登っている。我々の後にも続々とパーティが来て3パーティ後に続いた。南稜のテラスにも人が多勢待っている。烏帽子奥壁の全てのルートに人が登っていると云う感じだ。このルートは、浮き石が



烏帽子奥壁・中央カンテルートに登る佐藤

多く落石を起こしやすい。ホールドの剥がれにとっても気を使う。また所々濡れている所があり、いやらしい。各ピッチのビレー点で先行パーティにつかえ順番待ちをしながら登る。更に途中から変形チムニーからの3パーティが合流した。四畳半テラス前の核心部にはカナビナ付のアブミが残置してあった。終了近くでガスって来て視界が全く無くなる。懸垂岩のコルから踏み跡を下れば2ピッチの懸垂で南稜の下降点(6ルンゼ)に出ることが出来るのだが、ルートに自信が無く、今回はトレーニングを兼ねて、一の倉岳経由西黒尾根を回って下ることにした。5ルンゼの頭で1ピッチロープ出し、しっかりした踏み跡をたどって国境稜線に出る。後は一般道だけと思ったら大間違い。谷川岳の肩の小屋付近は残雪が多く夏道が出てこないのだ。その上視界が全くきかない。指導標の所でコンパスを出し、雪渓上で道が分からなくなって戻ってくる時の為と、スリップしても下までいかないためにロープ出す。1ピッチほどで夏道を発見。ホットする。あとは降りだした雨の中を急いで下った。

コースタイム

出合(4:30) - 取り付け(6:40) - 懸垂岩のコル(13:30) - 国境稜線(15:00) -
谷川岳(16:00) - 一の倉沢出合(18:30)

(古山 記)



オオカメノキ

徒渉訓練に参加して

1995. 6. 18

パーティ 本図一統、告広道、笹沢ひろみ with浦和浪漫

今回浦和浪漫の方々の徒渉訓練に参加させていただいた。ACC-J 茨城からの三名を合わせて、計11名で2つのチームに分かれて行なった。

奥多摩丹波川本流の流れは激しく、水も冷たかった。私は沢登りは過去5回程度の経験しかなく、どれも初心者向けの緩やかな流れであったり、ナメの美しい沢であったり、思い出してみても流れに対する恐怖心は感じたことが無かった。しかし今回は違う。水面を見ているとクラクラしてくる。まずは単独での徒渉。最初から流されてずぶ濡れになってしまい悲しかった。続いて、2人とか3人とか複数によるスクラム徒渉。これはかなり安定して行えると実感した。激流での足の運びも足底をズルズルとくっつけて移動させると云うことを高桑さんに指導していただいた。それからザイルを使ってトップの確保を上流、下流で2人で行った。上流での確保者は肩がらみで下流は徒渉しているトップの人が流されてしまったとき、勢い良くザイルをたぐり岸へ戻すと云った練習だ。これはタイミングが重要となり、下流での確保者がスムーズに引き寄せられなかった場合、ただちにザイルを離さないと徒渉者が溺れてしまうと云うことが良く理解できる。今度はセカンドの確保としてザイルをチロリアンで固定し、ハーネスに固定して両手はザイルをつかんで対岸に徒渉する。この時のロープとベルトの間はカナピナ3枚程度、下のほうで固定すると勢い良く体が流れた際、頭が重くなって水面に突っ込んでしまい呼吸困難となる可能性があると云うことだった。実際に途中で流されてみたが、足が激しく流されてしまって、足を着いてもとの姿勢に戻すのが大変だった。又、もう一度のセカンドの確保として両岸からV字に支えたと云う方法も学んだ。最後はザックピストンだ。これを考えた人はすごいなぁと実感してしまった。ザックが浮き輪に変身し、一瞬ここは流れるプールかな？と錯覚してしまう程、気持ち良かった。

お昼は流木を集めて焚火を起こし、しょうがのたっぷり入ったうどんをご馳走になり、からだの芯から温まりました。浦和浪漫の方々はとても勉強熱心な印象を受けました。今回は天気にも恵まれ、貴重な経験が出来、今後の沢登りに役立てていきたいと思っています。浦和浪漫の皆様、大変お世話になりました。

(笹沢 記)

《友好山岳団体の月報、会報、その他紹介》

ありがとうございました

月報

◎Rohman NO. 120 1995. 4 B5 26P 浦和浪漫山岳会

川内・谷沢・人分山・大池・日本平山、足拍子岳・クロガネの頭北尾根ほか

◎Rohman NO. 121. 1995. 5 B5 64P 浦和浪漫山岳会

川内・早出川周遊、春山合宿(田子倉湖・横山・猿倉山・村杉岳・倉前沢山・大曾根山・丸山岳・大幽朝日山・会津朝日岳、檜枝岐・会津駒ヶ岳・三岩岳・窓明山・坪入山・高幽山・丸山岳・大幽朝日山・会津朝日岳、倉谷・城郭朝日山・山毛櫸沢山・小沢岳・坪入山・高幽山・丸山岳・大幽朝日山・会津朝日岳、大幽沢・火奴山・丸山岳・高倉山・会津朝日岳、小幽沢・大幽山・会津朝日岳ほか

◎Rohman NO. 122. 1995. 6 B5 22P 浦和浪漫山岳会

〇B山菜山行(吐津川)、会越・大鍋又沢中俣左沢・笠倉山・大鍋又沢左俣下降、会越・蒲生川滝下沢・小金井山・井戸の沢右俣下降、越後・菅名岳、徒渉訓練ほか

◎月報・ZAC NO. 163 1995. 4 B5 16P グループ・ゼフィルス

奥志賀スキー場・焼額山・高標山・カヤノ平・毛無山・野沢温泉、黒姫スキー場・黒姫山・氷沢川・笹ヶ峰ダム・杉野沢、巻機山米子沢滑降ほか

◎月報・ZAC NO. 164 1995. 5 B5 16P グループ・ゼフィルス

網張・松川温泉、会津・火奴山・山毛櫸山、加賀白山、尾瀬、奥秩父ヌク沢、赤城山、奥秩父小常木谷ほか

◎わらじ NO. 469 1995. 4 B5 8P わらじの仲間

日光・赤薙山・女峰山・日光ほか

◎わらじ NO. 470 1995. 5 B5 8P わらじの仲間

会務報告ほか

◎わらじ NO. 471 1995. 6 B5 14P わらじの仲間

GW特集 飯豊連峰縦走、巻機山・下津川山縦走、劔岳三ノ窓尾根・チンネほか

◎逍遙 NO. 47 1995. 4 B5 12P 逍遙溪稜会

甲斐駒ヶ岳黒戸尾根、丹沢・四十八瀬川小草平ノ沢ほか

◎逍遙 NO. 48 1995. 5 B5 8P 逍遙溪稜会

谷川・平標山・平標沢(山スキー)、丹沢・四八瀬川勘七ノ沢、安達太良山(山スキー)、至仏山(山スキー)

◎逍遙 NO. 49 1995. 6 B5 14P 逍遙溪稜会

奥秩父・笛吹川ヌク沢左俣左沢、右沢、焼石岳、丹沢・早戸川原小屋沢、本間沢、苗場・神楽峰、奥秩父・滝川横ノ沢八百谷、月山山スキーほか

以上閲覧したい方は本図まで

《編集後記》

“継続は力なり”と言いますが、山にしても何にしても、如何に続けていくかと云う事が大切だと昨今感じるようになってきました。歳を取ったのかな？なんて思っ
てしまいますが、M氏を見ていると成程と云う感が有りますね。M氏が沢、山に情
熱を燃やし、いつ迄も継続して行っているから心身ともに力強いのでしょう。

話は違いますが私は、最近（R&V）表紙の絵を書いていて、忘れかけていた
物を見つけたような気がします。今度から少し絵に凝ってみようかな～なんて思っ
ています。（下手の横好きですが）どんな辛いことや、うまく行かない事でも最後
までやり通せば、必ず“王道”になると云いますからね。ですから皆さんも各々の
テーマを見つけ、その道の“王道”を歩き続けましょう。

（編集長）



ニリンソウ

季報[R&V]第17号 発行1995年 春号

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J 茨城

〒306-006 茨城県猿島郡猿島町逆井318

生井一男方

編集者：生井一男

印刷所：やさと印刷

